

レーダー気象に関する例会

日時：昭和39年2月18日17時

会場：学士会館

1. 小平信彦（気研台風）：ドップラ・レーダーについて（15分）

現在製作中の X-band 気象用 ドップラ・レーダーの概要と、39年度の計画について説明する。目下製作中のものは波長 3.2cm の気象研究所レーダーに附加して使用するもので、分解能は 1 m/sec. を目標としている。

2. 立平良三（名古屋気）：レーダーの降水探知能力に及ぼすビーム高度の影響（20分）

日本のような山国のレーダーは、地形障害により遠方では上空しか走査し得ないということが、その降水探知能力に致命的な影響を及ぼしている。しかもその影響の度合いが定量的に知り得ない点に問題がある。つまりこの問題には、ストーム内の反射係数の鉛直分布が関係しているからである。しかし統計的にはこの問題を追求することがある程度可能で、本調査では年平均の反射係数鉛直分布を、実際のエコー出現率のビーム高度による変化を利用して導き出すことを試みた。

3. 柳沢善次（気研台風）：低気圧周辺のミリ波レーダー・エコーについて（15分）

低気圧周辺のレーダー・エコーの垂直構造をしらべるため、ミリ波レーダーによる観測を行なったのでその結果について報告する。低気圧周辺を温暖前線域、寒冷前線域、低気圧の北側の3つの域に大別し、各区域で観測したエコーの特性と 140°E にそった垂直断面図と上層の収束、発散との関係等について解析した。

4. 中村理祐（種子島測）：レーダーで求めた台風中心の移動等について（15分）

台風眼のはっきりした台風中心を10分間おきに求めて台風中心の決め方、進行方向、速度などについて細かに検討した結果を報告する。

5. 野角吉憲（種子島測）：種子島で観測された低気圧に伴う線状エコーについて（15分）

低気圧中心付近の線状エコーについて調査し、寒冷前線および不安定線に伴う線状エコーを中心にした低気圧モデルを作成し、その結果を報告する。

6. 広森章・永福順則（種子島測）：九州西方で発生する副低について（15分）

低気圧が朝鮮海峡を北東進する場合、九州西方で副低状のエコーパターンが観測され、大雨を降らせる例について報告する。

7. 田畑七郎（種子島測）：線状エコーの低気圧中心に対する運動について（15分）

線状エコーの回転には時計回りと反時計回りがあるが、低気圧中心に対する運動としてみれば、台風のスパイラルバンドと同じ運動をしていることを示す。

8. 石硯浩（種子島測）：熊本豪雨におけるレーダー観測について（15分）

レーダー写真の重ね合せによる豪雨域の推定を行なった結果について報告する。

9. 宮沢清治（新潟気）：降雪バンドの発生と移動について（15分）

10. 深津林・立平良三（名古屋気）：北陸豪雪時のエコー・セルの発生・移動について（20分）

レーダーの連続写真からエコー・セルの発生点を求め、その頻度分布が上層風向に関連して特徴のある分布を示すことがわかった。また発生したセルのその後の移動もまた上層風と密接な関係があり、これらの関係は降雪域の予想に使える可能性がある。